

書 評

L・ダヴィドフ、C・ホール著／山口みどり・梅垣千尋・長谷川貴彦訳
『家族の命運 イングランド中産階級の男と女 1780～1850』
(名古屋大学出版会、2019年)

八谷 舞



本書は、イングランドにおける「中産階級のフェミニズムが休眠していた、もしくは不在であったと解釈されてきた時代」を対象とし、中産階級が勃興するにしたがってジェンダー的な社会通念が形成され、確立する過程を描き出すものである。ジェンダー史の文献としては古典のひとつに数えられる大著であり、本書は原著の初版が出版された1987年から約30年を経てようやく実現した邦訳である。

まず、本書の内容を簡単に紹介する。本書の舞台は、「都市」についてはバーミンガムに、「農村」についてはエセックスとサフォークにそれぞれ設定されている。第I部「宗教とイデオロギー」においては、信仰がイングランドにおける家庭重視イデオロギーの形成にあたって中心的な役割を果たしたことが述べられる。信仰は中産階級の人々の精神的支柱であったのみでなく、宗教関係の定期刊行物が人々のリテラシーを高めるのに役立ったことなどが指摘されている(52頁)。また、宗教活動における「無私」や「自己の放棄」の精神は女性と強く結びつき、女性は本来家庭領域に身を置くものとされたために、男性よりも生まれながらに宗教的であるとされた(61頁)。さらに牧師とその家族は教区の人々にとっての模範となり、教区の社会に積極的に関わることを期待された。

第II部「経済構造と経済機会」では、生産活動とジェンダーの関係が考察される。中産階級が階級としての独立性を高めるに伴って、男らしさと女らしさについても独自の理想像が作られていく。独立した経済力があり、

資産を運用し、また信託の形で家族に財産を残せることが望ましい男性性のあり方であると考えられた一方で、女性の財産は男性によって保護・管理されるものとなった。ただその一方で、事務職のような賃金労働は、「妻や娘たちの稼ぎをあてにせざるをえ」ないものであり、「肉体的な能力や手作業の技能と結び付いた男性性とはなじまない」と見なされていたことが述べられている(204頁)。またこの階級の女性の賃金労働が不可視化されてきた要因として、女性が収入を得ること自体が家族の評判を貶めうるため、そもそも記録されない可能性が高かったという史料的な問題が指摘されていることは注目に値する(235頁)。

第III部「日常生活―作動するジェンダー」においては、ジェンダー規範が中産階級の人々の日常生活にどのように影響したかという点が詳述される。この時代に現れた「職住分離」という生活様式は、郊外に庭園付きの家を持ち、家事使用人を雇用して妻を家事労働から解放するという中産階級の男性の理想を生み出した。家庭は女性の領域と考えられがちであるが、男性がまったく家政に無頓着であったわけではなく、子女の世話や庭仕事など、様々な場面で積極的に関わっていたという点も指摘されている(255頁、295頁)。しかし、それは男女が平等な立場で家庭における責任を分担したということの意味するものではなかったという点には留意する必要がある。ジェンダー規範は外見、社交、娯楽など、日常生活のあらゆる要素に強く影響し、生活様式は細部にわたるまでその人物のステイタスを示す重要な記号となった。

以上で見てきた通り、固定的なものと考えられてきた男女の「領域」は、実際のところは多分に流動的であり、複雑に入り組んでいた。しかし、女性が生産活動にふさわしくないとの社会通念が確立していくにつれ、女性の貢献は不可視化され、周縁化された。本書はこのように、相互関係によって成り立つジェンダーのダイナミズムを丁寧に描き出している。また、本書が女性に対する抑圧のみならず、その当時の男性に課せられたジェンダー規範の桎梏にも目を向けていることは、「女性史を書くことが男性について考えることをも意味する」(388頁)という点を示すものであり、とりわけ注目すべき点である。

また、巻末に「原著第二版に寄せて」「原著第三版に寄せて」が収録され

ていることも、この古典的名著を2020年の今読むにあたり、大きな助けとなる。特に筆者本人が「原著第三版に寄せて」の394~395頁において、初版出版時から現在までに歴史学上に現れた新しい視角に言及しつつ、「ジェンダーが権力、社会組織、歴史的变化の重要な基軸であるという議論は、依然として歴史叙述や歴史教育の主流をなすものにはなっていない」と述べている点は重要であろう。本来ならば本論に先立って読まれるべきこれらの文章が、邦訳書である本書では巻末に収録されているという点はいささか奇異にも映るが、邦訳版でのこの編集によって、先入観なく本論に目を通したうえで、史学史的な変遷を振り返りつつ今後の展望について考えることができる。

以上のような意義を認めつつ、刊行当時の本書が看過していたと思われる点を現在の視点から批判するならば、次のような点が挙げられる。

まず、本書が描き出したイングランド中産階級のジェンダー秩序や社会通念はイングランドに固有のものと言えるだろうか。もちろん、本書で述べられている通り、生活の中心に(特に国教会の)信仰を置く秩序のあり方については、間違いなくイングランド特有のものである。しかし、国教会を中心に据える秩序から締め出されたアイルランドのカトリック中産階級は、子女の教育機会をヨーロッパ大陸に求めることによって商業ネットワークを広げることを可能にした。また、近年では巽由樹子『ツァーリと大衆 近代ロシアの読書の社会史』(東京外国語大学出版会、2019年)や村上淳子『「主婦」と日本の近代』(同成社、2019年)のように、宗教も文化圏も大きく異なる地域の社会にも近代を通して中間的な階層が形成されたことに着目する研究も多い。これら他地域の中間層の多くは、多くの場合においてイングランドの中産階級を模範としつつ、独自の生活様式を築いた。今なお定義の難しいこれらの「中産階級」や「中間層」については、今後はますます比較史的な視野をもって検討することが必要となるだろう。

さらに、近代におけるジェンダー秩序の形成過程について考察する場合には、感情に対する規範意識についても着目する必要があるだろう。啓蒙の時代を経て、「理性」と「感情」は対立構図でとらえられるようになり、「理性」は男性、「感情」は女性と結び付けられ、女性の政治的無能力を主張する際の根拠とされた。こうした男女の差異は創られたものであるにも関わ

らず、本質主義的な立場から当然視され、近代のジェンダー秩序の出発点となった。この点に関しては、伊東剛史・後藤はる美編『痛みと感情のイギリス史』（東京外国語大学出版会、2017年）やウーテ・フレーフェルト著／櫻井文子訳『歴史の中の感情 失われた名誉／創られた共感』（東京外国語大学出版会、2018年）など、日本語で読める研究文献が近年特に充実していることは周知の通りである。

また、本書は女性が生産活動から切り離されて周縁化される過程を描き出しているが、その中で女性の主体性や戦略性がほとんど見られないという点もまた、現在の観点からは批判されうるだろう。訳者の一人である山口みどりによれば（「男女の領域分離」金澤周作監修『論点・西洋史学』、ミネルヴァ書房、2020年、204～205頁）、本書は領域分離を論じる上で「断絶」性により強く着目する立場をとるものであり、女性に許された数少ない公的領域で女性が活躍する様子に着目するものとはそもそも立場が異なる。ただ少なくとも近年は、歴史叙述の中に女性の主体性や戦略性を描き出すことが主流となっている（伊藤航多、佐藤蘭香、菅靖子編著『欲ばりな女たち』、彩流社、2013年など）。

ホールが指摘する、ジェンダーが依然として歴史叙述や歴史教育の主流になっていないという点は、ジェンダー史家の大半が共有する問題意識と言えるだろう。しかしその一方で、ジェンダーという分析視覚自体はすでに目新しいものではなく、高等学校の世界史教科書や副教材にもジェンダー史的観点からの記述は多く見られるようになった。こうした変化を経た今、本書はどのように読まれるべきであろうか。本書は、ジェンダー史の入門として用いられうるのはもちろん、同時にジェンダー史をいくらか学んだ人間にとっても、新しい研究潮流を踏まえて批判的に議論する材料にもなりうるだろう。また、現在のジェンダーイシューを考える上で、古典的な概念が有効かどうかについて検討することも可能である。近代の「職住分離」が男女の領域分離を加速させたとする議論は、現在もそのまま通用するであろうか。たとえば現在、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴って在宅勤務がほぼ標準化したことにより、「職住分離」から「職住一致」に半ば強制的に転換した結果、家庭内での性別役割分業がむしろ強化されている場合が多くあるということが各種メディアによって指摘されている。

ジェンダー間の不均衡という問題は、生まれた当時そのままの形で残存するのではなく、時代背景や社会情勢によって姿を変えながら何度も立ち現れてくるということの証左といえるだろう。

「原著第三版に寄せて」では、ダヴィドフとホールのそれぞれの自己形成が本書の研究に与えた影響が述べられている。ジェンダー史の叙述や歴史家の問題意識は、歴史家の生きた時代やその経験に大きく左右される。今後も歴史家がそれぞれに異なる問題意識を持ち、多彩な研究成果を発表することこそが、歴史学の立場からジェンダー主流化へ寄与するための近道となるだろう。

——亜細亜大学講師